7　適塾門下生「備中窪屋郡中嶌　別府真敬悴　別府琴松」について

木村　丹[1]・松田俊悟[2]
[1]木村医院（岡山県早島町）
[2]元山陽新聞社解説委員室室長（岡山県倉敷市）

内容の一部は二〇〇六年六月に日本医史学会関西支部大会で発表したが、未だ公表されない新しい資料を加え本総会で報告する。

適塾の姓名録に記載された六三六人の門下生のうち約二〇〇人は身元不明といわれている。姓名録番号二一六「備中窪屋郡中嶌　別府真敬悴　嘉永四亥十月別府琴松」は不明のうちのひとりであるとの先入観があり、プロファイルを明らかにすべく調査した。緒方洪庵伝（緒方富雄著）の壬戌旅行日記の中には、一八六二年四月二十一日から二十二日にかけて琴松が足守に帰省中の洪庵を訪問し面会したことが記述されている。当時の地名が残る明治二十二年作成の地図で足守と上中島の直線距離は約十三km。姓名録と緒方洪庵伝のふたつの資料をもとに調査を始めた。中島村は一八七八年（明治十一）に軽部村に合併吸収されたが、翌一八七九年に再び上中島村として独立し、一八八九年（明治二十二）に周囲の計六ヵ村が合併して清音村となった。

一九〇〇年（明治三十三）窪屋郡は隣接する都宇郡と合併して都窪郡になり、さらに二〇〇六年（平成十八）三月清音村は都窪郡から離脱して総社市に編入された。現在は総社市清音上中島という。

「中島」地名を頼りに総社市清音上中島に墓を見つけた後、岡山県歴史人物辞典、大阪市北区医師会報（一九六三年、琴松の曾孫　審一氏が記述）、適塾門下生調査資料、清音村史などの資料を見出し、「別府琴松」はある程度調査されている人物であることが判明した。これらの資料と日本医籍年鑑をもとに直系子孫である大阪府池田市在住の別府慎太郎氏を捜し面会し、百五十年間保管されている未だ公開されていない貴重な資料（祖先過去帳、父　真敬と琴松の苗字帯刀許可証、

琴松と子息　覚太の履歴書、清音小学校種痘人名、琴松の肖像画など）を見せていただいた。

琴松は天保四年（一八三三）十月二十九日に医業を営む父　真敬（一七九六―一八六八）と母　慶（一七九九―一八八〇）の間に長男として生まれた（一八三四年生まれとの資料もある）。嘉永元年（一八四八）一月から一年九ヵ月間浅口郡玉島村石坂典礼に従い、さらに嘉永三年（一八五〇）十月から八ヵ月間適塾出身の小田郡簗瀬村　山鳴弘蔵のもとで西洋医術の修練を積んだ。山鳴弘蔵の推薦書を持って嘉永四年（一八五一）十月適塾に入塾。安政元年（一八五四）四月まで二年七ヵ月間在塾し、西洋医学とオランダ語を学んだ。安政元年（一八五四）五月郷里の備中窪屋郡中島村で開業。医業に励んだことが評価され明治三年（一八七〇）一代限り苗字帯刀の許可を受けた。明治二十七年（一八九四）八月三十一日没、戒名は「編照院見外大徹居士」。

父　真敬、琴松、子息　覚太（一八五七―一九〇三）の三代が中島の地で開業し、その後三代（諭一、審一、慎太郎）は大阪府で開業医または勤務医をしており、計六代が医師である。琴松の孫　諭一の「諭」は福沢諭吉にちなんで付けられたといわれる。

「清音小学校生徒種痘人名」という文書があり、作成年月日と実施者の記載はないが、種痘を受けた四十六人の氏名と年齢が書かれてある。そのうち三人の墓を総社市に見つけ、逆算してこの文書が明治二十五年に作成されたことが判明した。また、明治二十五年一月、琴松は子息　覚太に土地・家屋を譲渡したという資料があり、その後の別府家の当主は覚太になる。よってこの文書の種痘は覚太によって実施されたと考える。

今回、琴松の肖像画を添えて報告する。